

くめはいじあと 久米廃寺跡



久米廃寺は白鳳期創建の寺院で、中国自動車道の建設に伴って岡山県教育委員会によって発掘調査が行われ、東から金堂・塔・講堂が一行に並ぶ独特の伽藍配置であることなど、その全容が明らかになった。発掘調査に伴う出土遺物は、大量の瓦をはじめ相輪片・塑像仏・埴仏などが主なものとしてあげられ、主要な遺構は寺域部分の中国自動車道を高架化して保存されている。

にいの 新野まつり



新野まつりは、新野山形の八幡宮を親神様として二松・天穂日・天津・天満神社の氏子たちが神輿をかつぎ、毎年11月3日に稲塚野の神事場に集まって豊穰の秋の祝い、新野郷すべての人々が喜びを確かめあい励ましあう一郷一所の大祭である。各神社の社伝は古く伝承行事もさまざまであるが、まつりの形態が今日のように郷土団結の様子を整えてきたのはおよそ室町期の頃であると推定されている。

たかのじんじやほんでん 高野神社本殿



現本殿は、寛文3年(1663)森長継によって再建されたもので、現釣殿も当時の遺構である。正面3間、側面4間、入母屋造妻入で向かい唐破風造の向拝を付す、いわゆる中山造である。屋根は銅板張(もと檜皮葺)。大棟の両端には大型の鰭をもった獅子口を置いている。軒は二軒繁垂木、蛇腹支輪をもった出組、肘木、木鼻の意匠は唐様、斗栱の間には形の整った蓼股を飾るが、全体的に装飾は簡素である。身舎の内部は正面1間通りを外陣とし、後の3間×3間を内陣とするが、その内陣の中に2間×2間の内々陣をつくっている。

いわやじょうあと 岩屋城跡



岩屋城は、嘉吉元年(1441)に山名教清が美作国の守護に任ぜられた際築城されたものであり、その後、天正18年(1590)8月に野火によって焼け、廃城になるまでの149年間にわたって山名、赤松、浦上、尼子、宇喜多、毛利の各氏が、美作国の制覇を賭けて激しい攻防がいく度か繰り広げられたものである。城は、岩屋山の山頂に本丸を置き、本丸を中心に三方向に曲輪を配した複雑な梯郭式の山城で、本丸南には馬場、西南に石橋上や椿ヶ峯砦を設け、更に西には小分城を築き防備を固めていた。本丸東には二の丸を置き、その南には三の丸を配しているが、東の谷の固めとして12本の堅堀りを設けている。そして更に大手南斜面には大小20箇所以上の防備の郭数をもつ山城は、美作地方では他に類をみたくものである。

袈裟襷文銅鐸



1950年、岡山県勝田郡勝央町植月北435番地の丘陵上の畑地において、同町植月在住の三島芳太郎が発見したが、放置していたため児童が玩具として使用するにいたっていた。翌年、同町の古物商が一時所蔵していたが、同年10月に津山市の所有となり、津山郷土博物館に収蔵した。この銅鐸は、吉備地方出土銅鐸の中でも最も古式のもので、美作地方において現存する唯一のものである。弥生時代の農耕祭祀を通じ、当時の社会を考えるうえで重要である。

尾所の桜



標高480メートルの高地にある1本立ちの山桜で、高さ約14.0メートル、幹回り6.3メートル、目通り高さ5.9メートル、枝張り東西に約20メートル、南北に約15メートルに伸び推定樹齢550年、地上約4.0メートルから四方に分枝し、樹姿壮大にして優美で高雅な気品があり樹下の眺望また佳絶である。西暦1450年・年号宝徳2年の頃、山伏が倉見越えの途中ここで休み、持っていた杖を残したまま出足した。その杖が根付いて今の桜の木になったものと伝えられている。例年は、4月20日前後に満開を迎える。

刀剣製作技術 (保持者 安藤幸夫)



保持者安藤幸夫(刀銘広清)は昭和22年2月4日津山市福井生まれ。昭和40年鎌倉市の研師西村勝政に入門、同47年刀工をめざし東京都の刀匠小林康宏に入門する。同55年文化庁より作刀認可を受け、翌年津山市に日本刀鍛錬場を開設する。同57年には新作名刀展に初入選する。

紙本墨画淡彩江戸一目図屏風



この作品は、津山松平藩の御用絵師であったくわがたけいさい鋤形蕙斎が文化6年(1809)に江戸の全貌を描いた鳥瞰図である。六曲一隻の屏風に仕立てられているが、元来は津山城内の襖絵であったと推測されている。